



舞いの範囲

隠岐および石見地方では、何人で神楽を舞うにしても、舞う場所の範囲が限られている場合があります。舞う場所は神が降りてくる聖域を示しており、上につるされている天蓋の範囲と対応している場合が多いようです。(写真は柳神楽のもの)

袴

石見神楽では、舞いの中に娯楽要素が強くなってきていますが、袴の形(裁着)は古来のものが受け継がれています。この裁着は、山伏の衣裳です。(写真は抜月神楽のもの)



彫物

舞処の聖域を示す注連などに取付ける、切り飾りです。花や鳥居など物の形を切り抜くもの出雲/石見神楽に多いと、神社名・社名を切り抜くもの隠岐神楽に多いの二通りあります。(写真は大元神楽のもの)



天蓋(出雲/石見神楽) / 玉蓋(隠岐神楽)

天井からつり下げられている覆いです。舞いの最中にこれを上下させる場合がありますが、これは神を降ろすための行為だと考えられていました。(写真は島後原田神楽のもの)

解析・神楽乃巻
神楽は元来、神を招来し託(たく)て言(こと)まれてきました。この言(こと)では島根県で行われている神楽に使われるものについて、地域の比較をしながらその違いの意味を考えてみましょう。

俵

石見の大元神楽で見られます。神楽中に降りてくる神の依り代になります。(写真は大元神楽のもの)



採物(舞)

採物舞は、神を招くための舞いです。この採物を媒介として、神が降りてきます。石見神楽では採物に輪鈴を用いますが、これは元来、山伏が持っていた錫杖の名残です。(写真は柳神楽のもの)

面

一般的な木彫面、石見神楽でよく使われる紙製の張子面などの違いはありますが、元来、面は神の顔をあらわしています。これを付けて舞うことは、神になることだと考えられていました。これは、直面(面をつけない)の採物舞のあとに、着面(面をつける)の舞いがセットになって行われることからわかります。(写真は三葛神楽のもの)



託宣 大元神楽
5年、7年、13年ごとに行われる。クライマックスには、託太夫が託宣を行う。(写真は江尾大元神楽のもの)

石見神楽

新旧の舞のコンビネーション
素朴さを残した古くからの舞いと、ダイナミックでアップテンポな舞い。この2つが全体の中で、みごとなコンビネーションをなしている神楽です。



古風 三葛神楽
八調子地帯にあるが、六調子神楽の古風さを保っている。



急速活発 有福祉神楽
荒舞部分での活発さを特徴とする。現代石見神楽の最先端をいく。



イヤハー! イヤハー!
島前神楽
島後神楽に比べて妻楽の調子が早く、「イヤハー、イヤハー」と声高な掛け声がいえる。



単純素朴 島後久見神楽
素朴単純な舞いだが、儀式性が強く、神事としての神楽の性格を感じさせる。

隠岐神楽

神事としての舞
ショーとしての舞いではなく、大漁祈願、豊作祈願、病気平癒のために神を迎える、神事としての舞いです。



社家神楽の伝統 島後原田神楽
隠岐神楽は、社家と呼ばれる専門職によって舞われてきた。その伝統を継承している数少ない神楽である。



洗練 佐陀神能
古来から伝わる出雲神楽を能楽風にアレンジしたもの。そのため、この神楽は「神能」と呼称されている。出雲一帯の神楽に、少なからず影響を与えている。



素朴美 大原神職神楽
佐太神能の影響を受けながらも、他の神楽には見られない素朴さを残している。

出雲神楽

三段構成の幽玄
七座(直面の採物舞)、式三番(能楽から取り入れた舞)、神能(神話劇)の三段構成が特徴です。



幽雅 奥飯石神楽
神職を中心にして伝えられてきた。舞いの所作に独特の幽雅さが感じられる。